

北極圏旅行記 2017-2018 冬 (19)

～12/31 透き通ったオーロラ (2) ～

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

オーロラは非常に淡い光芒である。町の灯火や月明は観望や写真撮影にとって障害になる。北極圏に着いた時は半月に近かったが、大晦日になると満月に近づき、ますます観望条件が悪くなってきた。私はあまり期待していなかったのだが、その認識は少し間違えていた。



月明の中、高い雲(巻雲や巻積雲)が出ていて、オーロラはその中で舞い始めた。オーロラは高度200kmから400km、雲はせいぜい高度8km-12kmなので、どう考えても「雲の向こうにオーロラが見える」はずである。しかし、この日のオーロラは、まるで薄緑色のガラスのように透き通っていて、雲よりもずっと手前に見えた。



しばらくすると、オーロラが立ち上がって、手前(自分が観望している方向)にせり出してきた。手を伸ばせば、そのままつかめそうな錯覚に陥った。

私は恐らく、北極圏でオーロラを15回以上見ているが、こんな不思議なオーロラに出会ったのは初めてだ。オーロラの正体はおよそ理解しているつもりだ。太陽からの荷電粒子が地球上層大気に侵入し、希薄な大気(主として窒素分子)を励起させて、それが基底状態に戻る時のエネルギー放出(可視光)が実体である。そんなことはわかっている、この「何もない空間(宙)が舞い光る」という現象は、一体何なのか? これは、現実には起きている自然現象なのか?



上の写真で、左側地平線近くに見える、オレンジ色の光は、一番近いビツタンギ村の灯火である。村付近は雲っていたはずだ。この日、北欧で晴れ間があったのは、私がいた周辺だけだったと思う。稀に車は通過するが、もちろん停止して空を仰いだりしない。

もしかすると、広大なスカンジナビア半島で、あの瞬間にオーロラを見ていたのは、私一人だったかも知れない。オーロラ自身にとっては、舞い光ることに何も必然性はない。いくら美しいオーロラでも、観測者がいなければ「存在した」ことにすらならない。だとしたら、この不思議なオーロラは、私の為に出現したのかも知れない・・・雪原で一人オーロラを見上げていて、私はふとそんなあり得ないことを思った。

オーロラの実体は、決して持ち帰ることはできない。目で見て写真に撮れるだけだ。しかし、私はジャムの瓶に、宙と一緒にオーロラを封入して、机上に飾っておきたいと思った。



